



## 四旬節第3主日(ヨハネ 4:5-42)

行って、ここに呼んで来なさい

3月12日をもって57歳になりました。何かいいことあるのでしょうか？ミサ中に「儀式書」を開く際、指に油がなくて頁がめくれません。歳を取るといえるのはこういうことです。それでもなお、今年一年に良いことがあるのでしょうか？贅沢かも知れませんが、中村大司教様のように、儀式書の頁を隣でめくってもらえる日が来たら、それは私にとっては良いことの始まりかも知れません。

さて朗読された福音は「イエスとサマリアの女」の場面です。今年四旬節は驚きの連続です。黙想会で田平教会の年間テーマを掘り下げるつもりで準備しましたが、講話で用いた聖書の箇所が、今過ごしている四旬節の朗読といくつも重なりました。怖いくらいに重なりました。

朗読された箇所はいくつかの省略が施されていますが、省略をうかがわせる箇所から入りたいと思います。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」(4・42)サマリア人の女性が何かを話しているはずですが、省略された部分はこうです。

「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれませぬ。」(4・29)サマリア人の女性が村人に語った言葉が、中田神父の目に留まりました。多くの村人たちはこの言葉に導かれてイエスを信じました。これはつまり、サマリア人の女性が実行した信徒による信徒のための宣教活動「信徒使徒職」だったのです。

彼女が「さあ、見に来てください」と村人たちに語りかけるまでに、彼女はどのような準備をしたのでしょうか。実は準備をしたのは彼女ではなく、彼女と「永遠の命に至る水」について語り合ったイエス・キリストだったのです。わたしたちの宣教活動も、準備してくれるのはイエス・キリストです。

「わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。」これは女性が村人に語った言葉です。彼女はイエスに呼ばれ、集められて、御父の御心を行う使命を与えられました。きっかけは自分で井戸に水を汲みに行ったことでしたが、そこで導かれたのは偶然ではなかったのです。

私たちに当てはめてみましょう。私たちがこのミサに呼ばれるのも、きっかけは自分でミサに足を運んだことですが、このミサに呼び、集め、御父の御心を説き、使命を与えるイエスの働きは偶然ではありません。最初から私たちを、使命を与えるためにお呼びになっているのです。

あとは、私たちがどう答えるかにかかっています。「さあ、見に来てください」と、生活の中で出会う人を連れて来るのか、生活に戻っても、ここで与えられた恵みや使命を誰にも知らせないで眠らせてしまうのか。私たちに掛かっています。私たちができれば、イエスに永遠の命に至る水を与えられた者として生活に戻りましょう。私たちと出会う人が、「その水をください」と言ってくれるチャンスを届けてあげる人になりますように。

四旬節第4主日(ヨハネ 9:1-41)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。